

第10節 隣近所の助け合い（共助）

災害時には、家屋等の下敷きになる人やけが人の発生、出火など、さまざまな緊急事態が発生する可能性があります。防災機関と連絡を取り合いながら、地域のみんなで力を合わせて活動しましょう。

1. 地震発生後の自主防災活動

地震が起こったら、まず自分の身と家族の安全を守ります。揺れがおさまったら、使用中の火気をすばやく消し、家族の安否や家の状況を確認し、安全が確保されたら、地域での活動に向かいます。

（1）隣近所の安否確認

隣近所で声を掛け合い、安否を確認する。

（2）出火防止

地震が発生したら、まずは、揺れがおさまるまで安全な場所で身を守り、揺れがおさまったら使用中の火気をすばやく消すことが大切なので、このことをあらかじめ地域の皆さんで徹底しておきます。

揺れがおさまって避難するときは、必ずガスの元栓を閉め電気のブレーカーを切ってから、周辺の安全を確認しながら避難するよう各家庭や事業所に呼びかけます。

（3）初期消火

火災を大きくしないためには、出火してから数分間勝負です。消火器や可搬式ポンプなどを使い、隣近所の人と力を合わせて消火に当たります。ただし、消防署が到着するまでの間、火災の延焼を防ぐのが基本です。決して無理はしないように。

（4）安否確認と救出活動

大規模な地震が発生すると、倒壊した家屋の下敷きになった人や負傷者が多数発生することが予想されます。各々の地域で、日ごろから安否の確認方法を決めておき、どこでだれが救助の必要になっているのかをできるだけ早く把握します。

大きな災害になるほど、消防等の防災関係機関の救助はいきとどきません。隣近所の人と協力しながら救出にあたります。ただし、救出作業は危険を伴う場合がありますので、二次災害に十分注意します。

（5）救護活動

ひとたび災害が発生すると、多数の負傷者が発生しますが、すべての負傷者がすぐに医療機関による治療が受けられるとは限りません。その場合は応急手当てを行い、救護所へ搬送しましょう。

（6）情報の収集・伝達

災害発生直後は情報が入手しにくい状況ですので、不確かな情報やデマによって混乱しないよう、自主防災組織が中心となって、正確な情報を収集し地域住民や関係機関に伝えます。

視覚・聴覚に障がいのある方や高齢者、日本語がわからない外国人の方などにも配慮し、すべての住民に情報がいきわたるようにしましょう。